

Feel the NCGM Plus



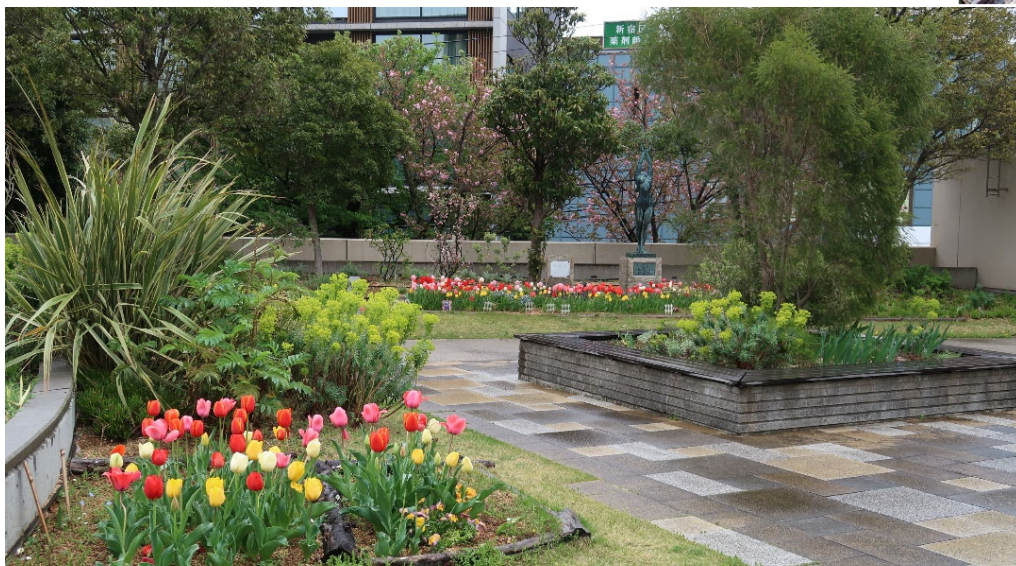
国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2024.6.20

Vol.11

3月～5月（季刊）



国際庭園には、四季折々のお花が咲いています！
詳細は8ページをご覧ください

CONTENTS

02 組織統合に向けた説明会が開催されました

新機構の英語名称は「Japan Institute for Health Security」に決定しました！

03 国立看護大学校の入学式が行われました

看護学部第24期生104名、研究課程部前期課程第20期生10名、
研究課程部後期課程第10期生2名の計116名が看護大学校で新たに学び始めます

04 主なできごと

mpoxに対する痘そうワクチン臨床試験 / ARISE年次総会の開催 / HHS・ASPRからの視察

09 センター病院診療科シリーズ

緩和ケア科・脊椎外科・脳神経内科・肝胆膵外科・放射線治療科・糖尿病内分泌代謝科・
ゲノム医科学プロジェクト(国府台病院)・難治性ウイルス感染症研究部を紹介しています！

14 研修医の窓

知識の継承と自己成長の旅 / レジデントチャンピオンシップ決勝戦に出場しました！

15 国際医療協力局グローバルヘルスレポート

“規範セッター”という仕事 / ラオス保健省から感謝状の授与 / 令和5年度大山激励賞の受賞

4月12日、組織統合に向けた説明会が開催されました

4月9日（火）に開催された第4回国立健康危機管理研究機構準備委員会において、新組織の組織体系のコアとなる部分の「設計図」である「国立健康危機管理研究機構の創設に向けて～感染症に不安を抱くことのない社会の実現～」が取りまとめられ、令和7年4月に創設することが決定されました。

また、新機構の英語名称は「Japan Institute for Health Security」略称は「JIHS（ジース）」と決定されました。

4月12日、報告書に関する説明会が厚生労働省主催のもと、NCGM研修棟5階大会議室にて開催されました。厚生労働省からは森光大臣官房危機管理・医務技術総括審議官らが出席し、国立感染症研究所からは脇田所長ら、NCGMからは国土理事長、武井企画戦略局長、杉山病院長、満屋研究所長らが出席しました。

説明会では、準備委員会における検討の経緯や、新機構が担うべき機能等について述べられました。また、設計図に基づき具体的な組織作りへ移行することに伴い、今後の議論の進捗状況を管理するため、新たに厚生労働大臣直轄の「国立健康危機管理研究機構 実行委員会」を設置することが発表されました。今後は実行委員会の管理の下、実務者会議（NN 会議）が開催され、令和7年4月の創設に向けて検討が進められていきます。



左：NIID脇田所長 右：NCGM国土理事長



説明を行う森光審議官



説明会の様子

■ 準備委員会の報告書等が下記リンクに掲載されましたのでご覧ください。

・ [国立健康危機管理研究機構 | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](https://mhlw.go.jp)

・ [（概要）国立健康危機管理研究機構の創設に向けて～感染症に不安を抱くことのない社会の実現～](#)

・ [（本文）国立健康危機管理研究機構の創設に向けて～感染症に不安を抱くことのない社会の実現～](#)

桜満開の4月9日、森光厚生労働省大臣官房危機管理・医務技術総括審議官、国土理事長をはじめとした厚生労働省、NCGM、ナショナルセンター関係者のご臨席のもと令和6年度国立看護大学校入学式が開催されました。

式辞で萱間大学校長は、「これから楽しいことも、苦しいこともあると思いますが、長いキャリアを通じて、本学は皆さんの成長を見守り、寄り添えることを願っています。そのような関係を相互に努力をして、作っていきましょう」と、看護職を目指す学び、またそのより深い専門性を目指す学びは、学生と教職員とのより良い関係性の中で行われていくものであり、大学側もそのために努力し、支援していくことを述べました。



萱間大学校長



国土理事長

ご祝辞をいただいた国土理事長からは、国立健康危機管理研究機構発足に向けた準備を進めており、国立看護大学校が新機構の重要な一翼となることに言及しつつ、災害時の医療救護活動もNCGMの重要な役割であること、そして1月1日に発生した能登半島地震では、看護師を被災地に派遣し被災医療機関の支援に当たったことに触れ、派遣した看護師には、看護大学校卒業生もおり、厳しい状況の中で高い使命感を持って支援業務に従事していただいたことを紹介していただきました。このような先輩の活躍は、新入学生にとって今後の大きな励みになることと思います。

今回の入学により、看護学部第24期生104名、研究課程部前期課程第20期生10名、研究課程部後期課程第10期生2名の計116名が、看護大学校で新たに学び始める



森光審議官

こととなります。この「素晴らしい人材である皆さんを、厳しくも大切に育てて」(大学校長式辞より)いくことが、私たち教職員の責務となります。



入学式の様子

3月13日、両国の協力関係を記念する式典を開催しました コロンビア共和国におけるmpox(エムポックス)に対する 痘そうワクチン(LC16m8)臨床試験

(寄稿)インターナショナルトライアル部 エグゼクティブマネジメント室長 友次 直輝

2022年7月23日WHO事務局長は、mpoxの国際公衆衛生上の緊急事態を宣言、同年12月に厚生労働省が、コロンビア政府及びWHOの要請に基づき、コロンビア政府への痘そうワクチンLC16m8の無償供与を発表しました。なお、本ワクチンは、同年7月にmpoxに対しても適応追加されました。国立感染症研究所（感染研）の全面的協力により、DCCの氏家無限医長と当部が、ワクチンの有効性、安全性および免疫原性を検証する臨床試験をコロンビアで実施することになりました。

2023年3月コロンビアの訪問や週例ミーティングを通じて、国立コロンビア大学の研究者らと臨床試験デザインを作成し、その過程により信頼関係も構築することができました。その後、財政や規制などの様々な困難がありましたが、2023年12月にFirst Patient In（最初の被検者組み入れ）、続いてワクチン使用期限2024年2月が迫る中、土日やクリスマスを返上してご尽力いただいた結果、接種者556例を達成しました。

2024年3月13日、コロンビア共和国INS（コロンビアNIH）にて、本臨床試験を通じた両国間の協力と中和抗体価測定技術の提供を記念する式典を開催しました。コロンビア側からは、保健省副大臣Dr. Jaime Urrego、INS所長Dr. Giovanni Rubiano、本臨床試験Principal Investigatorである国立コロンビア大学Prof. Carlos Alvarezらが、日本側からは、在コロンビア日本国特命全権大使の高杉優弘閣下、NCGM 国土典宏理事長（ビデオスピーチ）、杉浦亙臨床研究センター長、国立感染症研究所 感染病理部第一室 峰宗太郎主任研究官らにご出席いただきました。

両国からのスピーチでは共に、今回の臨床試験の実現は両国間における密接な協力関係によるものであり、両国の関係発展のためにも良い契機となると讃えて下さいました。特に、国立コロンビア大学Prof. Alvarezによる「両国のチームはone teamである」とのご発言は、参加者に大きな感銘を与えていました。また、杉浦先生のHIV治療、峰先生のmpoxの基礎研究に関するご講演は非常に分かり易くかつ興味深く、参加者は熱心に聴講されていました。最後に、記念品贈呈、写真撮影を以って式典を終了しました。

今後、コロンビアで中和抗体価測定試験を実施するために、日本で調達した資材を6月頃、輸出する予定で手続きを進めています。秋ごろまでには中和抗体価測定の結果が出て、結果を論文化する予定です。



記念式典の会場の様子



記念式典の出席者の皆さま



左から：友次室長、濱名研究員、杉浦センター長、高杉日本大使、Urregoコロンビア保健省副大臣



国立コロンビア大学研究者・感染研およびNCGM研究者

第2回ARISE(パンデミックへの備えと感染症領域における研究開発に向けた国際ネットワーク)年次会議を開催しました (寄稿)国際ナショナルトライアル部 パブリックリレーション室長 市川 雅人

去る2月6日、7日の2日間わたって、第2回ARISE年次会議をNCGM研修棟5階大会議室他にて開催しました。大雪の中、国土典宏理事長を代表として、7か国（インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、日本、コンゴ民主共和国（オブザーバー））15名の運営戦略委員が来日しました。

開催に先立ち、次回から代表となる杉山温人センター病院長、2月に着任された国際ナショナルトライアル部和田耕治部長の紹介が行われました。また、加盟施設については、今回から九州大学、マレーシアのマラヤ大学医療センターが新たに参加し、合計14施設となりました。



運営戦略委員会では、東南アジア、東アジア地域における国際共同臨床試験の推進というARISEの使命、ビジョン、目的を確認し、特に感染症領域の研究開発に注力するとともに、将来の医療政策や実践につなげるための具体的な基盤を構築していくことを確認しました。また、キャパシティビルディング、ネットワーキング、研究協力を戦略化するため、各参加機関のプロフィールをまとめることになりました。

第3回となる次回は、11月に開催することとなり、杉浦互臨床研究センター長がタイに赴き協議調整を行った結果、タイのシリラート病院が幹事施設となりました。開催については改めてご報告をさせていただきます。



※ARISEとは、東南アジア・東アジア国際共同臨床研究アライアンス、ARO Alliance for Southeast & East Asia (ARISE : アライズ) の略、次なるパンデミックに迅速に対応するための準備並びに、国際共同臨床研究・試験のネットワークとして、薬事承認申請のための医師主導治験/企業治験の実施を通じたアジア地域における研究開発の発展を目指しています。(<https://arise.ncgm.go.jp/>)

3月19日、HHS/ASPR使節団がNCGMを訪問しました

(寄稿)国際感染症センター 特任研究委員 田沼 智子

2024年3月19日(火)、米国保健福祉省 戦略的準備・対応管理局 (HHS/ASPR) からの使節団5名が、国立国際医療研究センターを来訪し、日本の新興・再興感染症対策や取組みについて情報・意見交換ならびに新感染症病棟の視察を行いました。また、国土理事長、武井局長への表敬とともに、国土理事長によるNCGMの組織紹介も行われました。

情報・意見交換では、大曲貴夫国際感染症センター長から「NETEC (※) -NCGMパートナーシップ」について講演が行われ、松澤幸正国際感染症危機管理対応推進センター・運営室長の司会のもと、「新興・再興感染症の準備・対応に関するNCGMのビジョン」、「グローバル・パートナーシップに関するHHS/ASPRのビジョン」、「NCGM/DCCとアジア諸国とのパートナーシップ」、「感染症臨床施設におけるサージキャパシティの課題」等について議論が実施されました。

本訪問は、友好的な雰囲気の中で行われ、本プログラムにより新興・再興感染症対策におけるグローバルパートナーシップの重要性が再確認されました。

※国立新興特殊病原体研修・教育センターNETEC; National Emerging Special Pathogens Training and Education Centerは、HHS/ASPRが、米国の特殊病原体のケアシステムの構築を行うため実施しているコンソーシアムです。



意見交換の様子



集合写真



視察の様子



5月7日、ウクライナからの研修医が報告会を行いました

NCGMは日本政府のウクライナ支援に医療協力の分野で参加しており、2024年1月から医師の研修を受け入れています。今回は3月から2か月間、Oleksandra Nemensha医師（ご専門：麻酔・集中治療）が来日し、センター病院の救急科・麻酔科等で学びました。

5月7日、研修の報告会を行い、ウクライナの医療制度やNCGMでの学びについてお話をしてくださいました。研修期間中、麻酔科で指導をくださった前原医師は、「NCGMでの学びがウクライナで役に立てれば嬉しい、傷んでいる患者さんの力になってほしい」と述べました。



左から：西原特任研究員、国土理事長、Oleksandra Nemensha医師、前原ペインクリニック内科医長、高倉国際医療協力局長、牧野政策室長



発表を行うOleksandra Nemensha医師

センター病院正面玄関前、国際庭園は、ボランティアの皆さんによって、四季折々の花を咲かせます

来院・入院される患者さんの憩いの場ともなっている「国際庭園」は、長年ボランティアの皆さんによって、植え替え、草むしり、花の手入れが行われています。

ボランティアの方々が、年間を通して様々なお花を植えてくださっています。国際庭園に咲いている四季折々のお花は、ボランティアの皆さんによる活動の賜物です。これから、夏に向けたお花の準備がはじまります。NCGMにお越しの際は、是非訪れてみてください。



センター病院診療科 シリーズ No.19

緩和ケア科

当院の緩和ケア科は緩和ケア病棟を持たないコンサルテーション型サポートチームです。がん終末期の疼痛だけではなく、非がん疾患も含め、診断時点から生じる様々な全人的苦痛（身体的苦痛や生活困難や家族ケアなど）に対して包括的に対応します。主治医の了解を前提として、看護師や他職種からも電話連絡のみで依頼可能とし、迅速に多職種チームによる介入を開始しています。また、緩和ケア外来では主にがん患者への症状緩和やAdvance Care Planning等を行っています。

教育活動として、がん診療に携わる医療者に対する緩和ケア研修会（PEACE）、緩和専門領域における第一人者を講師としたグローバルヘルス緩和ケア研究会などを行っています。今後、当院の医療従事者全体の基本的緩和ケア能力を向上させ、地域がん診療拠点病院として提供すべき、高いレベルの緩和ケアを目指して診療内容の充実を図っていきたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



（緩和ケア科医長 木内 大佑）

センター病院診療科 シリーズ No.20

脊椎外科

脊椎外科は2023年4月に新しくスタートし、現在は松林、坂本、砂山の三人体制で外来や手術を行っています。整形外科から専門化され独立した形ですが、外来はこれまで同様整形の枠の中で金曜日をメインにして火曜日以外は診察を行っていますので、お困りのことがありましたらご紹介頂ければ対応させていただきます。

手術に関しては、坂本が低侵襲な脊椎内視鏡専門医の資格を持っており、一般的な腰椎椎間板ヘルニアや腰部脊柱管狭窄症であれば手術翌日から歩き始め、術後数日から1週程度で退院可能です。また、高難度の手術に関してもほとんどのものは対応できますので、それぞれの患者さんに最適な治療を提供できるように心がけています。

立ち上げて1年間で多くの職種の方々に大変お世話になりました。また、診療科横断的な治療となる場合に助けて頂くことが多く、感謝申し上げます。手術件数も年間180件程度に増加し、今後も診療の質を向上させていきたいと思いますので、引き続きご支援よろしくお願いいたします。

（脊椎外科医長 松林 嘉孝）

センター病院診療科
シリーズ No.21

脳神経内科

当科は昭和38年から標榜する伝統をもつ診療科です。脳神経内科領域全般を診療しています。日本神経学会教育施設・東京都脳卒中急性期医療機関であり、2014年よりStroke Care Unit (SCU) を運用しています。

当科で診療する疾患は脳卒中や痙攣発作などの救急疾患から認知症やパーキンソン病などの変性疾患、重症筋無力症などの神経免疫疾患など多岐に渡ります。周辺や近隣の区には大学病院が多数ありますが、大学病院と同レベルの診療を行うべく日々努力しております。

救急搬送患者さんが多いため、主に脳卒中急性期や痙攣重積発作などを多数診療しています。脳梗塞急性期の患者さんに対しては積極的に血栓溶解療法を行っています。

2024年4月現在日本神経学会専門医が3名、フェロー1名、レジデント3名で診療しております。日本臨床神経生理学会認定医が2名おり、脳波や電気生理検査も積極的に行っています。慢性頭痛の患者さんも専門的に診療しております。今後も地域の患者さんのために脳神経内科疾患を盛り上げたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(脳神経内科診療科長 新井 憲俊)

センター病院診療科
シリーズ No.22

肝胆膵外科

肝胆膵外科を受診するよういわれたときの患者さまの不安は想像に余りありますが、ぜひ当科をお気軽に受診してください。当科の医師が親身になってお話を伺います。

当院の肝胆膵外科が対応しております領域は、皆さまがお考えになっていらっしゃるよりも幅広く、胆石やヘルニアといった良性疾患から、肝胆膵領域の悪性腫瘍まで診療を行っております。さらには消化器外科の一部門として、急性虫垂炎や穿孔性腹膜炎など腹部救急疾患にも対応出来るよう、常に研鑽を積んでおります。また、当科では膵島移植診療科や糖尿病内分泌代謝科と連携して、慢性膵炎に対する自家膵島移植や1型糖尿病に対する同種膵島移植といった先進的な医療にも取り組んでおり、最近では外部の先生方からの問い合わせも増えております。

ナショナルセンター唯一の総合病院で各種診療科が揃っているという強みを生かして、若い方から心臓や肺・腎臓などに持病のあるご高齢の患者さまにも安心して手術を受けて頂けるように、ますます心掛けてまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。

(肝胆膵外科診療科長 稲垣 冬樹)

センター病院診療科 シリーズ No.23

放射線治療科

放射線治療科では、強度変調放射線治療（IMRT）、回転型強度変調放射線治療（VMAT）、体幹部定位照射（SBRT）等の高度の照射が可能な、2台のリニアック（治療機器）を用いて、がん患者に高度な放射線治療を行っています。さらに、画像誘導下放射線治療（IGRT）を用いて、照射毎の臓器の位置を確認し、腫瘍に対して正確に照射しています。また、呼吸性変動を伴う乳腺、呼吸器腫瘍、肝腫瘍等に対しては、適切な呼吸制御を行い、治療成績の向上に努めています。

当科のリニアックの特徴は、故障に伴う休止が少ない点があります。これは、リニアックのメンテナンスが良好であるためで、休止による治療成績の低下を抑制しております。医師、診療放射線技師、看護師、事務員により1日2回のカンファランスを行い、照射技術のみならず、日々の診療を通じてケアの向上に努めております。

（放射線治療科診療科長 中山 秀次）

センター病院診療科 シリーズ No.24

糖尿病内分泌代謝科

糖尿病内分泌代謝科は糖尿病診療（糖尿病総合診療センター）と内分泌代謝疾患診療（内分泌・副腎腫瘍センター）を両輪として診療・研究を行っています。糖尿病診療においては、コメディカル（看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、臨床検査技師など）、糖尿病合併症に関連する診療科とも連携し、診断から治療まで、最適な医療の提供を目標としています。1型糖尿病に対する先進的な医療（インスリンポンプ、持続血糖モニターなど）、肥満診療、膵島移植にも力を入れています。さらに術前あるいは入院中に血糖管理が必要な患者さんを兼診でサポートしています。内分泌代謝疾患診療においては、各種ホルモン異常症、内分泌腫瘍、難治性の高血圧や電解質異常など幅広い疾患が対象です。特に集学的な管理が必要な副腎腫瘍（褐色細胞腫、クッシング症候群、原発性アルドステロン症など）は、外科系診療科、麻酔科、放射線診療



部門と連携して高レベルの診療を行っています。糖尿病領域、内分泌代謝領域ともに豊富な臨床データを用いた臨床研究も推進しています。外来・病棟でお困りの症例がありましたら、お気軽にご相談下さい。

（糖尿病内分泌代謝科診療科長 田辺 晶代）

研究所部門シリーズ
No.22

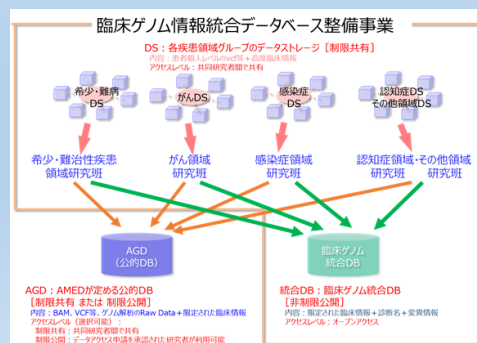
ゲノム医科学プロジェクト(国府台)

ゲノム医科学プロジェクトは平成27年に開設され、平成28年度から開始された臨床ゲノム情報統合データベース(MGeND)を主に行ってきました。

MGeNDは、①ゲノム情報と疾患特異性や臨床特性等の関連について、②日本人を対象とした検証を行い、③臨床及び研究に活用できる臨床情報と遺伝情報を統合的に扱うデータベースを整備し、④その研究基盤を利活用した先端研究開発を一体的に推進すること、を目的に行ってきました。主たる目的は「がん」「希少・難治性疾患」「感染症」「認知症」「難聴」の疾患領域を対象とし、臨床・遺伝子変異データの閲覧や、遺伝子名や染色体ポジションからのデータ検索が可能なオープンアクセスのデータベースです。難病・がん・感染症・認知症等の疾患分野において、検体の収集およびゲノム解析、加えて臨床情報を含めた情報の統合・解析をおこないました。臨床現場医療現場においてはゲノム医療を実装する基盤を構築されました。さらに、令和3年度からMGeNDの管理・運営は厚生労働省に移管され、ゲノム医科学プロジェクト(戸山)を中心として、慶應大、京大などの国内の他の施設と共同して、拡大・充実を進めています。

一方、ゲノム医科学プロジェクト(国府台)では、近年、DNA, RNA, タンパク質のいわゆるCentral dogma以降の第3の生命鎖として注目を浴びている糖鎖の臨床応用を目指して、難病・がん・感染症・認知症、心疾患について、NCGM内外の臨床の先生たちと研究を進めています。

(ゲノム医科学プロジェクト長 溝上 雅史)



NCGM公式チャンネルを開設しました！ YouTube

この度、NCGM公式チャンネルを開設しました！YouTube社より日本の医療機関として認証をいただき、情報発信元としても担保いただいています。

現在(5/15時点)、49本の動画を公開しています！



NCGM_国立国際医療研究センター。

@NCGM1868・チャンネル登録者数 109人・49本の動画

国立研究開発法人国立国際医療研究センター(NCGM)の公式アカウントです。...さらに表示

ncgm.go.jp、他6件のリンク



こちらからご覧いただけます！

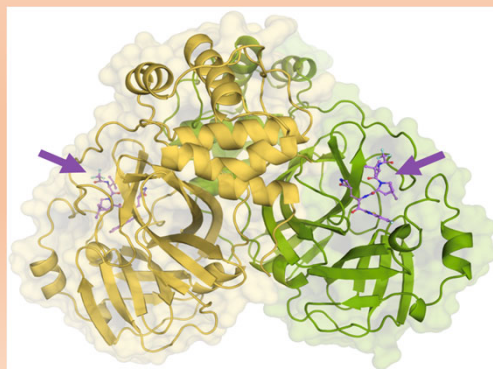
<https://www.youtube.com/@NCGM1868>

AIDS、B型肝炎、COVID-19等の 難治性ウイルス感染症の治療薬開発を進める

1985年に世界初の3種のAIDS治療薬（アジドチミジン、ジダノシン、ザルシタビン）、2003年にダルナビルの開発に成功した満屋部長率いる難治性ウイルス感染症研究部は研究所に2014年に新設され、今ではB型肝炎ウイルス、SARS-CoV-2等の感染症の病理発生解析や新規治療薬の開発を進めています。ウイルス感染症の攻略はre-purposing等の「行き当たりばったり」の方策ではうまく行きません。難治性ウイルス感染症研究部はウイルスのアキレス腱となるウイルス酵素等の構造解析等を通じて、治療薬候補を探索・デザイン・合成し、臨床開発を目指しながら、NCGMでの臨床研究の進展に必要な技術・知識を供与します。

「難治性ウイルス感染症ウイルスについて学ぶだけでなく、如何にしてキラーウイルスの魔手から人々を救うか」というmottoでこれからも本研究部の精鋭達は新しい道を開拓しながら進みます。

右図: COVID-19の病原ウイルスSARS-CoV-2の生存に必須のウイルス酵素に結合して極めて強力な活性を示す新規化合物TKB272(紫の矢印)の結晶解析の図。



世界マラリアの日の4月25日を挟んで3日間、 センター病院アトリウムで啓発ポスター展示が行われました

世界マラリアデーを記念し、熱帯医学・マラリア研究部では、センター病院中央棟アトリウムで、マラリアの流行状況や同研究部の活動報告に関するポスター展示を行いました。

ポストコロナに至っても、いまだに流行地に対策資材が届かないなどが原因で、世界の年間新規マラリア患者数は昨年より増加して2億4900万人、死亡者数は若干減少して年間60万8千人です(WHO, 2023)。

狩野部長は、「NCGMは、わが国をリードして、世界のゼロマラリア達成に貢献しなければいけません」とのメッセージを発信しました。



左：蚊のTシャツを着た狩野部長
右：ポスター見学に来られた遠藤理事

研修医の窓

NCGM研修: 知識の継承と自己成長の旅

センター病院 初期臨床研修医1年目・唐鎌 黎央

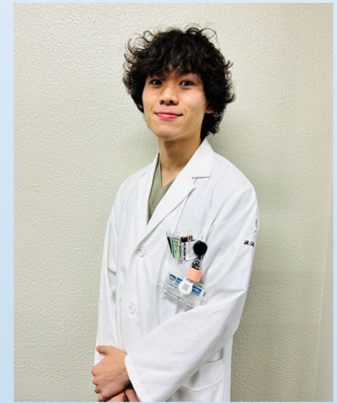
NCGMでの研修生活が折り返し点に差し掛かり、残り1年間でさらなる自己研鑽を積むと共に、経験と知識を次世代に継承する役割を迎えようとしています。

この1年間で十分な学びを習得できたのか、またその経験が後輩たちにとっての価値ある知識となり得るのか、深い思索にふけることがあります。

それでもNCGM内での研修医としての役割を理解し、知識や教訓の伝達に挑戦したいと考えております。また、この挑戦を通じ、多様性と変化を受け入れる力を身につけ、診療に活かす力を養うことが目標です。

この場をお借りしてNCGMで働く全ての人々への深い感謝の気持ちを表したいと思えます。皆様の支えがあり、私たち研修医は充実した研修を送ることができています。

そして、この研修プログラムが全ての参加者にとって、後世にも続く、価値のある素晴らしい経験となることを心から願っています。



レジデントチャンピオンシップ決勝戦に出場してきました！

センター病院 初期臨床研修医2年目・岩瀬 昭一郎

先日3月17日に日経メディカル社主催の[第7回レジデントチャンピオンシップ](#)という大会の決勝戦に出場してきました。詳細は公式サイトを参照いただければと思うのですが、簡単に言うと全国の初期研修医を対象にした医学のクイズ大会のようなものです。

今年の1月に予選が行われ、1年間NCGMの先生方にご指導いただいたおかげと幸運が重なり決勝に進出することができました。決勝戦自体は負けてしまったのですが、試合後に決勝に出場した全国の研修医の方と交流することもでき充実した時間を過ごすことができました。

4月には初めてのNCGMの後輩となる新研修医の先生方も入職し、1年が経つのはあっという間だなと感じております。

今後も自分なりに精一杯研修に励むつもりですので、何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.8

私は2023年12月から世界保健機関（WHO）本部ガイドライン評価委員会外部委員を務めています。

WHOガイドラインの作成プロセスや内容についての基準は、WHO handbook for guideline developmentに詳細に記載されています。ガイドライン評価委員は、計画段階と完成目前のガイドラインがこの基準を満たしているかを評価します。評価方法は論文の査読と似ていますが、ガイドラインは論文よりも圧倒的に頁数が多いので、査読評価は大変な作業です。

一つのガイドラインが世に送り出されるまでに世界中の専門家の多大な労力がつき込まれているのを実感するとともに、自分がその一部を担っていることに責任感とやりがいを感じています。

WHO本部：ガイドライン評価委員会外部委員 大川 純代

（国際医療協力局 運営企画部・グローバルヘルス政策研究センター併任/上級研究員）



国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.9

私は2024年3月からGaviワクチンアライアンスのプログラム政策委員会委員として活動しています。Gaviは、低所得国の予防接種率を向上させることにより、子どもたちの命と人々の健康を守ることを目的として、2000年にスイスで設立された官民連携パートナーシップです。プログラム政策委員会は、Gaviのプログラムの技術的、政策的側面につき、理事会の決定を補佐します。

グローバルヘルスにおける国際公益と日本の国益、Gaviの支援モダリティと低・中所得国の保健政策決定（特に予防接種事業へ

の自国財政によるファイナンス）の接点での調整機能を果たしたいと思います。



Gaviワクチンアライアンス：プログラム政策委員会委員 村上 仁医師（国際医療協力局 人材開発部部長/医師）

「ラオス持続可能な保健人材開発・質保証制度整備プロジェクト」の日本人専門家に対し、ラオス保健省より感謝状が授与されました

本プロジェクトは、2018年7月23日より、5年5ヶ月にわたる事業で、活動期間の約半分の期間が、新型コロナウイルス感染症拡大に世界が揺れた時期であり、ラオス保健省はその後の経済危機下での業務を余儀なくされました。

そのような中、カウンターパートの非常に高いコミットメントによって、国家試験や看護師インターン研修制度の実施を通して、保健人材（特に、看護師および助産師）の質の確保に資する免許登録制度導入を達成しました。

プロジェクト終了時には、最後のとりまとめに当たった専門家3名

に対して、ラオスの行事であるバーシーセレモニーが行われ、保健省から感謝状が授与されました。5年5ヶ月の間、様々な形でプロジェクトに関わり、ご支援いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。



写真右から
チーフアドバイザー：NCGM国際医療協力局 虎頭 恭子客員研究員、保健大臣、看護教育・看護管理専門家：NCGM国際医療協力局 菊池識乃看護師、業務調整専門家 小熊誠氏

国際医療協力局の駒田 謙一医師が「令和5年度大山激励賞」を受賞しました

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター（NCGM）国際医療協力局運営企画部の駒田謙一医師が「令和5年度大山激励賞」（主催：公益財団法人 大山健康財団）を受賞しました。

「大山激励賞」は、発展途上国で短期間ながら医療協力を尽くし、特に感染症対策に尽力した医療関係者で、今後とも発展途上国においてなお一層の活躍が期待される方に授与される賞です。

駒田医師の受賞は、2010年～2011年の、JICA専門家としてミャンマーにおける主要感染症プロジェクト、2011年～2012年の、ラオスにおける同国初の人口ベースの全国B型肝炎有病率調査、2012年より5年間におよぶ、JICAザンビアHIV/AIDSケアサービス管理展開プロジェクトの長期専門家としての活動などが評価されました。



※駒田医師は、2018年から現在に至るまで、グローバルファンド理事会に継続的に参加し、現場経験を活かした日本代表团への技術的アドバイスを通じて、世界的なHIV/AIDS・結核・マラリア対策の進展にも貢献しています。

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
NCGM 広報企画室



<https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM Plus/index.html>

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。